

資料

修道女の歴史と看護の職業化

History of Nuns and Professionalization of Nursing

青山美智代¹⁾, 勝井伸子²⁾Michiyo Aoyama¹⁾, Nobuko Katsui²⁾

要旨

看護の始まりはキリスト教と深く関わっている。キリスト教では「七つの慈悲の行為」を神への奉仕として重要視し、その実践者として多くの高貴な女性医療家たちが賞賛され、聖人に列せられた。キリスト教会が慈悲の行為の施設として建てた病者の家が病院の始まりとなり、修道院に住む修道女は神への奉仕として世話をを行った。修道院は結婚しない女性に名誉ある人生の機会を提供した。その後、俗世で修道女に準じる姉妹が世話を実施する職業人として養成され、女性の社会的地位と階級の問題への解決策となった。19世紀後半の近代医学の進歩とともに、修道女の道徳（宗教）教育、教育病院での講義と実践と病院管理の教育、病棟の雑役業務からの解放により、修道女による神への献身としての世話から、その道徳性は残しつつ、労働者階級の雑役婦的業務から解放され、独身中流階級女性にもふさわしい職業としての看護に至り、看護の職業化が起こった。

キーワード：看護、修道女、職業化

Key Words : Nursing, Nuns, Professionalization

はじめに

現代の看護職者は世界の医療職者のうちで約59%、2,790万人を占め、最大の職業グループを形成し、その圧倒的多数を占めるのは女性であり¹⁾、女性の職業としても極めて重要な地位を占め、2020年の日本では医療福祉系が女性では最大の職業グループ（22.6%）となっている²⁾。歴史的に見て、職業としての看護職の誕生と深いかかわりを持つのがキリスト教である。ネルソンは、日本の近代看護は、キリスト教宣教団、ナイチンゲール、赤十字などの影響により西洋の看護と同じ理念に基づいていると述べている³⁾。日本で使用している看護理論、看護診断もキリスト教社会の米国版が翻訳されて導入されている。キリスト教と修道院における人の世話の意味、看護の職業化のプロ

セス、女性の生き方としての修道女の看護職誕生への関係は、看護の職業化の理解には重要である。

目的

フランス、英国を中心とした国内外の関連文献をもとに、中世から近代の人の世話に関する修道女の活動の歴史と病院の始まりから看護職の誕生までの経過を記述する。

方法

フランス、英国を中心として中世から近代におけるキリスト教世界と人の世話に関する修道院の活動、医療、病院、女性の職業に関する国内外の関連文献を主要文献として、既に収集した文献に加えて、Google Scholar、国会図書館で収集し精

¹⁾ 四條畷学園大学看護学部看護学科 Faculty of Nursing, Shijonawate Gakuen University

²⁾ 奈良県立医科大学 Nara Medical University

読した。英仏を中心とした理由は、フランスには病院の元祖といえるオテル・デュで活動したカトリックの修道女の存在、平信徒の女性による組織的看護活動を展開した慈善修道会の活動があり、英国ではプロテスタントとカトリック双方の修道会の活動と職業的看護職を育成したことから、英仏の二国が看護の職業化に大きく影響したと考えたからである。

文献からキリスト教における人の世話と女性、女性の社会的地位と職業、医療や病院の変遷、看護職の誕生に関する記述内容を抽出し解釈した。次に、解釈した事柄の裏付けとなる社会環境について資料を収集して考察した。

結果と考察

必ずしも時系列順ではなくテーマごとに、中世以来の慈悲の行為が女性の人生とどうつながるか、そこに病院、医療の変化がどうかかわっていったかという視点から述べた。

1. 七つの慈悲の行為—「神への奉仕としての世話」と女性

西欧において、キリスト教以前と 392 年におけるローマ帝国のキリスト教国教化以降では、病人の世話は全く違った位置づけがなされていた。キリスト教以前の西欧では、病気は罪、痛みや死は罰であると考えられたため、罰から逃れるために神殿で司祭の供犠を受けるか民間療法の治療師に助けを求め、病人は罪人のように社会から隔離されるのが普通であった⁴⁾。例えば、痛み (pain) はラテン語の poena, ギリシャ語の poeine を語源と

し、「罪に対する罰」の意味を持っていた⁵⁾。しかし、キリスト教では、病人と世話する人との密接な関係が強調され、罪と罰の構図はない、という痛みの意味の大きな転換があった⁶⁾。イエスが病人を癒す新約聖書の多くのエピソードは、病人は排斥すべき罪人ではなく同情・共感の対象であることを示唆する。キリスト教以前は忌まわしいものに触れる忌避すべき行為であった病人の世話が、キリスト教世界では、神への愛の行為へと大きく格上げされ、他人の世話は、神への献身を意味し、信者としての義務とまでされた。セーマーが指摘するように、しだいに病気や貧困に苦しむ人の世話 (以下、世話とする。) は、「隣人への愛と奉仕とが神への愛と同じほど拘束力を持つクリスチャンの義務」となり⁷⁾、最後の審判における「永遠の救済を得るために励むべき善き行い」の中に含まれるまでに格上げされた。

さらに、世話はキリスト教の崇高な慈悲の行いとされ、承認と栄誉が与えられる活動として位置付けられるという変化が生じた。そのことは、図 1 に描かれた飲食物・衣服などの施与、旅人・病人の世話、囚人の訪問、死者の埋葬など七つの慈悲の行為から読み取ることができる。ここに描かれた行為は、現在の看護でいう日常生活援助に近い部分も多い。図 2 は図 1 中の病人の世話場面である。絵の背景に病室が描かれ、病人と世話する人とベッドが確認できる。前景の女性は慈悲の行為として病人を訪問して世話し、キリスト教的努めを果たす富裕な女性として描かれる。左側の男性は医者というより聖職者のように見える。都市



図 1 七つの慈悲の行い

The Seven Works of Mercy Master of Alkmaar, 1504, 2021.11.3 入手

<https://www.rijksmuseum.nl/en/content-search/?q=seven%20works%20of%20mercy>

の拡大と相まって、世話という行為は、親族以外の他人をも対象とするキリスト教の美徳の象徴として流行した時代を示している⁸⁾。

社会の上層の女性による世話は尊敬を集め、世話をする姿が絵画に描かれ、聖人に列せられる女性も現れ、女性医療家と呼べる人々も現れたことは注目すべきである。聖ヒルデガルト・フォン・ビンゲン (1098～1179)、聖エリザベート (1207～1231)、聖カテリーナ (1347～1380) といった女性たちは、医療の研究や世話を実践し、絵画に英雄的に描かれた⁹⁾。ヒルデガルトは、女修道院長、ドイツ薬草学の祖、作曲家、芸術家としても知られ、ハンガリーの王女、聖エリザベートは、1228年マールブルグに病院を建て、貧困者を看取り、ハンセン患者の世話をし、24歳で死後聖人となった。ドミニコ会所属の修道女、シエナの聖カテリーナは、病人、貧者の世話をして聖人となった。彼女らは、キリスト教世界で病人の世話が美徳の象徴となったことを表す存在である。

2. 病者の家—病院のはじまり、オテル・デュー

キリスト教世界においては、教会・修道院は、7つの慈悲の行為の実践の場として、世話をするための施設を設立し、これが後の病院の原型となっ



図2 図1中の病人の世話場面

た。世話には教会が直接関わり、教会は世話される人々を保護する建物の建設も行った。修道会を中心とした組織的な世話の施設として「病者の家」が作られ、7世紀には、修道院の中に「旅人の家」、「病者の家」、「貧者の家」、「老人の家」が建てられ、660年にはパリにオテル・デュー「神の家」が開設され、これが現在なお残る世界最古の病院となった。10世紀には病院事業は修道院の主要事業となり、医術や病人の世話に関する教育、研究の中心として機能していた¹⁰⁾。図3は16世紀のオテル・デューの室内を描いた版画であるが、患者に食事を与える修道女、埋葬の準備をしている修道女、死が迫った患者に聖餐を与える聖職者が、キリストの図像を中心に描かれている。病院は、修道女、聖職者がともに七つの慈悲の行為を実践する場であったことがわかる。

3. 修道院の戒律と世話

修道院では、修道士 (女) が世話をを行った。修道士 (女) とは修道院内に定住し、貞潔、清貧、上長に対する服従 (obedience) を誓願し、隠遁生活を送る者である¹¹⁾。彼らは独身と修道院への寄付 (女性は結婚持参金に相当する金額) が求められたことから、修道院は富裕層の家督相続人以外の受け皿として機能した面があり、結婚しない富裕層のもう一つの人生の場でもあった¹²⁾。修道士



図3 16世紀のオテル・デューの室内の様子

Tollet, Casimir : Une Salle de L'Hotel-Dieu au XVI Siècle, 1892, U.S. National Library of Medicine Digital Collections, 2021.10.30 入手, <https://collections.nlm.nih.gov/catalog/nlm:nlmuid-101435668-img>

(女) は聖書を読む必要性から読み書き能力が求められ、宗教改革以前のヨーロッパの識字率が5%以下¹³⁾と推定されることから、結果として修道士(女) は教育を受けた富裕層の大きなグループを形成したという特徴がある。

ベネディクト(480頃～547年)の戒律ですでに、修道士(女) による病人の世話は神への信仰の行為とみなされていた。戒律において「病人を世話することは、キリスト自身を世話するのと同じこと」とされ、その報いとして救済される¹⁴⁾ことも明示されていることから、病人の世話=神に仕えることという位置付けは明らかである。ベネディクトの戒律によれば、世話をされる側は世話をする者の信仰心のおかげで世話されていることを理解し、無理な要求は控えるべきとされていた¹⁵⁾。つまり、修道院における病人の世話とは、宗教的行為、神への献身に価値が置かれ、「服従」「沈黙」「謙遜」はすべて病人ではなく神へ向かうものであり、上長への服従も信仰の施設、制度としての修道院制度の維持のためのものであると考えられる。修道院で世話を受けていた病人、および前述のオテル・デューでの病人は、社会階級の低い人々であり、慈悲の行為として無償の奉仕を受けていたことを留意しておく必要があるだろう。

19世紀後半から20世紀前半の看護は、信仰生活の延長ではなく職業的看護職の養成によって労働の意味合いを強めた。フライによれば、看護職養成では道徳的訓練が重視され、良い看護師は良い女性として、整理整頓、時間厳守、親切、上司や医師に従順であることを期待されていたと述べている¹⁶⁾。このことから、長く修道士(女) によって実践されてきた戒律の「服従」「沈黙」「謙遜」の要素は、組織に属して世話に従事する看護職者の規範として、従属的な態度を期待される背景となった可能性は否定できない。

4. 病人の世話に従事する修道女と姉妹—女性の地位と階級

職業的な看護職が19世紀後半に出現するより前に、病人の世話に従事する修道女が活動し、姉妹が養成された。この二者は活動範囲と階級の違いがあったが、キリスト教の信仰に基づいている点

は共通していた。佐藤によれば、病人の世話に従事する修道女の多くは、監督者として看護・病院業務全般を指揮し、修道女の下で世俗の助手(男女とも)が働いていた¹⁷⁾。病人の世話に従事する修道女は隠遁生活を送る誓願をたて、宗教上の制約により自由な活動が制限されていたため、フランスでは1633年から平信徒による慈善修道会が病人の世話に従事する助手として「姉妹(soeur: スール)」を養成するようになった¹⁸⁾。

修道女と姉妹には階級の違いから生じる選考条件の違いがあった。姉妹会の圧倒的多数が身分の低い階級出身者であるため、80%は文字の読み書きができず、修道生活に必要な知識も修道院に入るための持参金もなかった。そのため、心身共に強靱であること、道徳的・性的品行などを問う入会審査が厳格に行われた。合格して入会した者には安定した収入、住居、衣服、安全、病気や高齢になった場合の相互扶助制度、そして社会的地位の向上という恩恵が与えられた¹⁹⁾。病人の世話が女性の仕事として定着する過程の視点から、姉妹になることは、「結婚をせずに家庭の事情で生家にとどまれない女性にとって、この会の存在は生きていくための数少ない選択肢」であった²⁰⁾。1633年に最初にパリで設立された聖ビンセンシオ・ア・パウロの愛徳姉妹会による病人の世話活動は、誓願を立てた修道士・修道女による神聖な行為から、神への献身を世俗で実践し、かつそれを生業とする職業女性である姉妹による、神聖でありながら職業として生計を立てられる活動であり、名誉ある仕事として承認され、生活の糧を得る数少ない選択肢の1つであった。修道院が結婚しない富裕層の女性に生きる場所を提供したように、姉妹会に入会することが、低い階級の女性に結婚以外の生きる場所を提供し、特に階級の低い女性が病人の世話を通して神への奉仕を行い、社会的地位上昇を可能とした。この地位上昇が、低い階級の女性が家庭内使用人として雇用された場合との違いなのである。こうして姉妹は職業としての看護師の先駆けとなった。

女性の社会的地位も、看護の職業化への動きを強めることになった。1804年に成立した『フラン

ス民法典』は女性に市民的平等を認めず、女性を未成年者、軽犯罪者、精神異常者と同列の能力に欠けた存在と位置付けた。女性は結婚して男性の庇護下にあって初めて社会的地位を得られるシステムであり、独身女性は修道女や姉妹として病人の世話の担い手であることによって、ようやくある程度の社会的自立性と役割が得られた²¹⁾。

5. 修道女と看護職の医療専門職化

フランスにおいては、修道女は強い宗教的信念に基づく誓願に基づき、いかなる疫病にもひるまず活動する側面は社会で認知される一方で、カトリック信仰がしばしば医療への関心に優先される場合があり、修道女は19世後半に目ざましい発展を遂げた外科学など新しい医療の革新への知識、職業的教育が不足するとみなされていた。修道女の最新の医療への知識不足は、病院が修道会とは切り離され、医療へのキリスト教会の影響が弱まるにつれて、修道女の大病院から宗教的な施設での業務や訪問看護等への移行につながった²²⁾。1792年の病院修道会廃止により、病院が宗教行為から世俗の活動へと明らかに移行した影響を受け、修道女の宗教性や誓願は高く評価されなくなったが、病院での看護職養成教育・看護実践では修道女の宗教性・道徳性は有用とみなされた²³⁾。修道女は、都会の病人の訪問事業、病院業務のための女生徒の育成を行い、医薬品にも通じ、農村部では、多目的共同体を形成し、女子教育のための女学校の運営、病人の訪問や物資の支援などの事業を行い、病院以外での多くの貢献があったと言える。これまで医療に触れる経験がなかった民衆が、修道女の活動によって、身体と健康を他人にゆだねることに慣れることで、看護、医療、福祉の制度を受け入れる準備を整えたことが近代医学の発展の素地となったという指摘もある。修道女は実際には看護職の医療専門職化のプロセスの一翼を担ったとも言えるのである²⁴⁾。病院での看護から退いたとはいえ、19世紀後半の英国でも、修道女はむしろ増加傾向にあり、英国の1891年の国勢調査では病人の世話に従事する修道女と愛徳姉妹(Nun, sister of charity)が4,678人いたことが記録されている²⁵⁾。信仰生活よりも看護労働に主軸

を置いて活動した愛徳姉妹の存在に並行して、19世紀にはプロテスタント派女性においても、プロテスタント系修道会の復活もあいまって、娘・妻・母の家庭内の役割の枠を拡大して社会の求めに応じる活動の道が見え始めてきた²⁶⁾。このように、看護における修道女の役割は大きく、女性の生き方と社会での尊敬すべき女性としての居場所を提供し、社会に貢献するという意味では大きなものがあったと言える。

6. 19世紀後半の英国の「余った女たち」

プロテスタントであるナイチンゲールの看護職養成が始まる19世紀後半以降の英国における女性と仕事について簡単に触れておく必要があるだろう。戦争や植民地の英国人はほぼ男性で占められ、英国国内の就業可能人口はそもそも女性のほうが多かった。また、15歳以上の独身の男女の差は、1851年の72,500人から1871年の125,200人と20年間で72.7%増加した。植民地で働く男性は中流階級が多かったことから、独身女性も相対的に上流および中流階級にもっとも多くなったが、資産を持たない独身中流階級女性に適した職業は少なく、唯一の仕事が上流階級の子女の家庭教師(ガヴェネス)だが供給過多であり、結果的に独身中流階級女性は社会問題化していた²⁷⁾。

川本によれば、英国における無職の独身女性はしばしば「余った女たち」と呼ばれた²⁸⁾。国勢調査によれば、女性の労働力比率は32%(1851年)から27%(1891年)へと減少し、特に25歳—35歳の女性の無職率は49.4%(1851年)から65.4%(1891年)へと増えていた²⁹⁾。中流階級女性のガヴェネス以外の職業への進出を奨励する論者も現れた：

一万人を時計製造職人の徒弟奉公に出しなさい。一万人に幼児教育の教師の訓練を施しなさい、一万人を計理士にしなさい。あと一万人をフローレンス・ナイチンゲールによって訓練されたディアコニッセのもとで看護婦の訓練を受けさせなさい³⁰⁾(翻訳 勝井)。

フランスにおいて、独身女性が病人の世話の担い手として修道女・姉妹になることが自活の道と

社会的な階級を手に入れる手段であったように、19世紀後半の英国で看護は独身中流階級女性の生きる道として注目されるようになった。

7. 看護の職業化

1) Nurse, not domestic servant と Nurse, domestic servant

看護職は当時の英国ではどういう立ち位置だったのだろうか。1801年の第一回以来国勢調査では、職業は男女固有のものとして分類していた。教師は圧倒的に女性が多く、ガヴァネスは女性固有の職業と分類され、nurseも女性固有の職業と分類されていた。

ナイチンゲールの『看護覚え書き』における1851年の国勢調査のデータ引用では、Nurse, Domestic Servantが39,139人、Nurse, not Domestic Servantは25,466人いたと記載されている³¹⁾(表1)。Nurse, Domestic Servantとは、家庭で雇用される乳母や子守などで、大多数は若い女性であった。一方Nurse, not Domestic Servantsは病院など公共の場で働く職業看護婦であった。nurseを家事使用人と職業看護婦に区別して記録したことは、『看護覚え書き』以前にすでに看護の職業化は始まっていたことを示している。そして、牧師や神父は記載があったが、修道士(女)の記載はなかった³²⁾。つまり、病人の世話をする修道女を意味する看護修道女 nursing nunという呼称は、当時は存在せず、この呼称が登場するのは後世のことである。

職業看護婦には多くの労働者階級の女性と少数の中流階級の女性が含まれていた。なお、この「職

業」は occupation と記載されていた。英国国勢調査上では、professionという言葉が使用されるのは、あくまで従来通りの聖職者、医師、法律家であり、国勢調査上の profession はあくまで狭義の伝統的知的専門職に限定され、階級とのつながりが強く感じられる。一方、単に生きるすべ、生計手段という広い意味合いで profession が使われることがあったのは、Bessie Rayner Parkes が結婚は女性の “business, trade, and profession” であると述べていたように、単に、生きるすべ、生計手段という広い意味合いで profession が使われることもあることは注意を要する³³⁾。

2) ナイチンゲール以前に存在した4種類の病院看護婦と階級

19世紀前半の病院看護婦 (Nurse, not Domestic Servant に分類される人々) には4種類の人々—アシスタントナースあるいは日勤看護婦、夜勤看護婦、シスターあるいはヘッドナース、メイトロンが含まれると Helmstadte³⁴⁾ は述べている。今日のスタッフナースに相当するアシスタントナースあるいは日勤看護婦は労働者階級の女性で、主として病棟の清掃、および簡単な看護業務を担っていた。夜勤看護婦は病棟以外の病院の清掃をしている女性から選ばれた。シスターあるいはヘッドナース (今日の師長に相当する) は患者の看護業務の責任者で、中には看護の熟練者もいた。この場合、シスターは職階名であり、修道女、あるいは姉妹を意味せず世俗の存在であった。今日の看護部長に相当するのがメイトロンと呼ばれる病棟の女性スタッフの雇用・管理の責任者で、病棟の

表1 「大英帝国において看護師として雇用されている女性の数の覚え書き」
GREAT BRITAIN.

TABLE A.—AGES.

NURSES.	All Ages.	Under 5 Years.	5—	10—	15—	20—	25—	30—	35—	40—	45—	50—	55—	60—	65—	70—	75—	80—	85 and Upwards
Nurse (not Domestic Servant).....	25,466	624	817	1,118	1,359	2,223	2,748	3,982	3,456	3,825	2,542	1,568	746	311	147	
Nurse (Domestic Servant).....	39,139	...	508	7,259	10,355	6,537	4,174	2,495	1,681	1,468	1,206	1,196	833	712	369	204	101	25	16

フローレンス・ナイチンゲール, 湯槇ます他訳: 看護覚え書き; p266, 現代社, 2011.

秩序、清潔さ、寝具、リネン類、家具などの管理責任を負っていた。シスターやメイトロンは主として中流階級の出身で、いわゆるジェントルウーマンであるが、メイトロンの前職は屋敷内の使用人の管理者である家政婦であることが多く、看護の経験はなかった。このように、中流階級の女性であっても看護教育を受けた看護婦は皆無に近かったのが19世紀前半の状況であった。

3) ナイチンゲール以前から始まる看護教育システムと雑役婦業務からの解放

19世紀半ばから英国で看護活動と看護職養成が始まった。アイルランド女子修道会 Sister of Mercy は清貧・貞節・従順を掲げて、修道女を病院へ派遣し、英国最初の看護職養成機関 Protestant Sisters of Charity (1840年に創設) は入会者に読み書きの試験を課した³⁵⁾。ナイチンゲールは英国国教会の St. John's House Sisterhoods (1848年に創設) の教育を聖トマス病院に看護師訓練学校として創設する際に参考としたが、この施設は病院、社会への慈善活動を目指して看護教育を実施した³⁶⁾：

- (1) 道徳的原則を持つ職業人となるように修道女が道徳(宗教)教育を施した。
- (2) 教育病院での医師による講義、看護実践、病院管理の最低2年の履修を義務づけた。
- (3) 雑役婦雇用により清掃業務から看護婦を解放し、ケアに専念できる環境を整えた。

修道女の神への献身の行為としての世話が、その道徳性は残しつつ、労働者階級の雑役婦的業務から解放されて、中流階級にもふさわしい職業としての看護に至ったと言える。

4) visiting から working へ：ジェントルウーマンの参入

ジェントルウーマンがかつての七つの慈悲の行為としての慰問 (visiting) ではなく、毎日規則的に行う勤務 (working) を行い、収入と相応の社会的地位を得ることができるよう道を開いたのが看護の職業化であった。元々家庭使用人を雇用する立場であったジェントルウーマンは、雑役婦やスタッフナースを雇用し管理するメイトロンとして、Lady Superintendent (施設管理者の意) という

新しい肩書も手に入れた³⁷⁾。このように、名誉ある社会的地位と生計維持手段を19世紀英国社会の「余った女たち」に提供した結果、看護の職業化が進んだと言える。

結論

フランス、英国を中心とした国内外の関連文献をもとに、中世から近代の世話に関する修道女の活動の歴史と病院の始まりから看護職の誕生までの経過を追うと、キリスト教との深い関わりが明らかである。教会が病院の起源となる施設を創設し、修道女は神への奉仕として世話をを行った。修道院は結婚しない女性の社会的地位と階級の問題への解決策を提供した。19世紀後半の近代医学の進歩は、修道女の活動場所を訪問看護などへと変革し、労働者階級の雑役婦的業務から看護職を解放し、独身中流階級女性に適した職業としての看護職を生み出し、看護の職業化が起きた。看護職養成においては修道女が教育者として大きな役割を果たした。

本研究は、科学研究費助成事業の助成を受けた。(平成29年度～平成32年度基盤研究C17K01040)

文献

- 1) 国立研究開発法人 国立国際医療研究センター 国際医療協力局：世界の看護2020 日本語版, p8, 2020/8/14 入手. kyokuhp.ncgm.go.jp/library/other_doc/2020/Sekainokango2020_46M_n.pdf
- 2) 総務省統計局：労働力調査(基本集計)2020年平均結果, 2021/1/10 入手
<https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/nen/ft/index.html>
- 3) シオバン・ネルソン著, 原田裕子訳：黙して、励め－病院看護を拓いた看護修道女たちの19世紀－；日本語版への序文, p viii, 日本看護協会出版会, 2004.
- 4) 梶田昭：医学の歴史；p85, 講談社学術文庫, 2003.
- 5) スー・チュラーリ, 勝井伸子, 渡辺知花：異文化理解とヘルスケア；pp65-82, 日本放射線

- 技師会出版会, 2008.
- 6) 梶田:上掲, p102.
 - 7) ルーシー・リンジー・セーマー, 小玉香津子訳: 看護の歴史; p 30, 医学書院, 1979.
 - 8) アン・ハドソン・ジョーンズ編著, 中島憲子監訳: 看護婦はどうみられてきたかー歴史、芸術、文学におけるイメージ; pp22-34, 時空出版, 1997.
 - 9) クリスティン・ハレット, 中村哲也監修, 小林政子訳: ヴィジュアル版看護師の歴史; pp18-19, 株式会社図書刊行会, 2014.
 - 10) セーマー:上掲, p39.
 - 11) 聖ベネディクト, 古田暁訳: ポケット版聖ベネディクトの戒律; pp25-27, ドン・ボスコ社, 2018.
 - 12) ルドー・J・R・ミリス著, 竹内信一訳: 天使のような修道士たち; p28, 新評社, 2001.
 - 13) 永田諒一: 宗教改革の真実ーカトリックとプロテスタントの社会史ー, 42, 講談社現代新書, 講談社, 2004.
 - 14) 矢内義顕: 聖ベネディクトゥスの『戒律』: 中世キリスト教社会の健康指針, 医学哲学医学倫理 3; p24, 1985.
 - 15) 同上: p24.
 - 16) Fry S. T., Johnston M. J. 著, 片田範子, 山本あい子訳: 看護実践の倫理 (第3版), pp65-66, 日本看護協会出版会, 2005.
 - 17) 佐藤典子: 看護職の社会学; pp135-37, 専修大学出版局, 2007.
 - 18) 同上, p48.
 - 19) ネルソン:上掲, pp31-34.
 - 20) 佐藤:上掲, p48.
 - 21) ジャン・ボベロ, ラファエル・リオジェ: 聖なる医療ーフランスにおける病院のライシテー; p81, 勁草書房, 2021.
 - 22) 佐藤:上掲, p137.
 - 23) ボベロ:上掲, p 80.
 - 24) 同上, pp84-85.
 - 25) A Vision of Britain through Time, V. —OCCUPATIONS.2021/10/30 入手. <https://www.visionofbritain.org.uk/census/EW1891GEN/7>
 - 26) ネルソン:上掲, p44.
 - 27) 川本静子: ガヴァネス (女家庭教師) ヴィクトリア時代の<余った女>たち; pp14-19, 中公新書, 1994.
 - 28) 同上, p ii .
 - 29) 滝内大三: 19世紀イギリス女性の職業とキャリア形成, 大阪経大論集, 56, 6; 32-3, 2006.
 - 30) Barbara Leigh Smith: Women and work; p17, New York, C.S. Francis & Co., 1859. 2021/11/3 入手 <https://www.loc.gov/item/04000765/>
 - 31) フローレンス・ナイチンゲール, 湯植ます他訳: 看護覚え書き; p266, 現代社, 2011.
 - 32) Great Britain. Census Office: Census of Great Britain 1851; p137, 2021/10/30 入手. <http://tankona.free.fr/censusuk1851.pdf>
 - 33) Bessie Rayner Parks: Statistics as to the Employment of the Female Population of Great Britain, English Woman's Journal, 5 (25), 1, 1860.2021/11/3 入手 https://ncse.ac.uk/periodicals/ewj/issues/ewj_01031860/page/1/articles/ar00103/
 - 34) Carol Helmstadte: Building a New Nursing Service: Respectability and Efficiency in Victorian England, Albion: A Quarterly Journal Concerned with British Studies, Winter, 35 (4), 590, 2003.
 - 35) J. A. ドラン, 小野康博, 内尾貞子訳: 看護・医療の歴史, 誠信書房, 210, 1995.
 - 36) Helmstadte, 上掲, p591.
 - 37) 同上, p591.